



【解説】

開祖の著書である「宇宙之精神」（明治三十九年十月三十日に神習教大教廳出版部から発行）の第六版が筆者の手元にある。その本の扉に掲載された漢詩の写真が原典である。

神習教は陰陽道ではないが、万物の生成は陰陽の二面から成ると云う。二面とは、伊弉諾、伊弉冉の二神、人の男女などの対の様相である。この神がなす運動が万物の生成を生み、それが宇宙に広がることを「敷化」と云うのであろう。

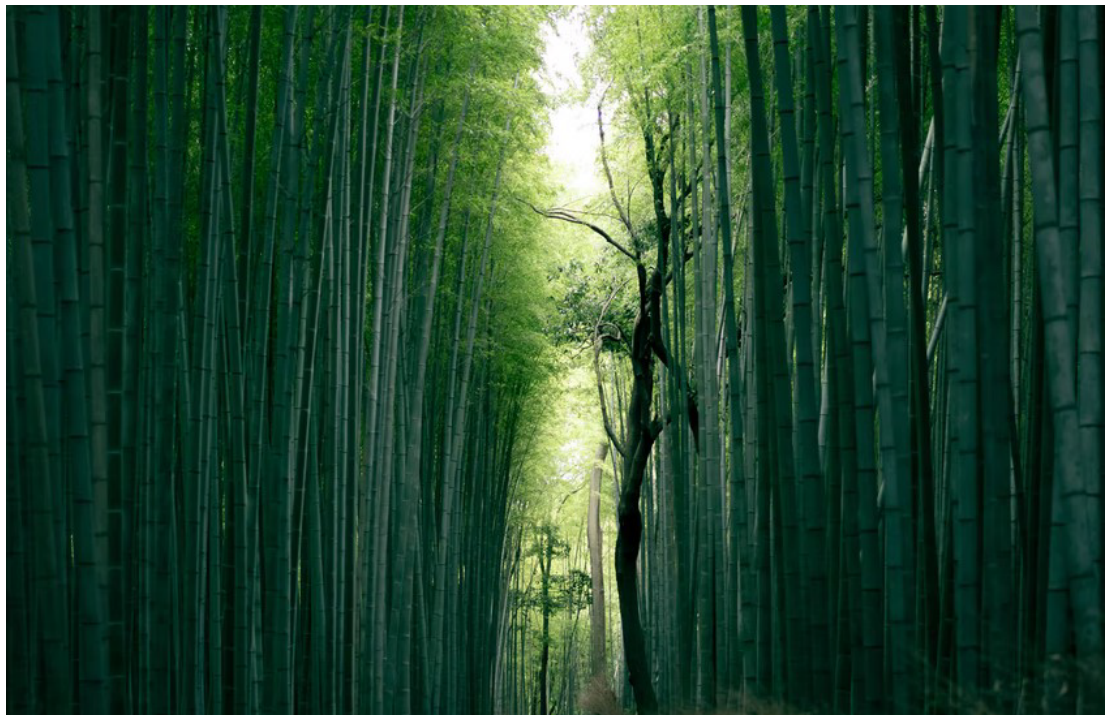
正乗は、自身の布教の使命を「神道問答」として詩編に書いているのであるが、中でも「かみながら」という真言は秘伝である。

今日、全国の神社で六月三十日（夏越の祭り）と十二月晦日に

「大被祝詞」が奏上されるが、これは「大中臣被」とも云われ、祝詞の文中に、「かみながら」とだけ続く箇所がある。

それは相伝である為に、内容が明らかにされていない。

筆者は「かみながら」という言霊は、南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経と仏家各宗で唱えられるように、また、キリスト教では十字を切って「God bless you」と唱えた後に、ヘブライ語で「Amen（かくあれの意）」と宣言する如く、教えの中心概念が真言として著わされているのと同様であると考えるのだが、如何であろうか。



この詞は天宗、即ち天上界の尊い神々の祖神から流れ出たものであると云う。布教での説明に際し、正乗は、よく現象を見せて神の存在を感得させていたようで、霊的儀式では雲で山を覆ったり、雲を切り開いたりしたとある。霊驗第一の誉れは多くの信者を集め、衆人の前で金粉が降ったりしている。

神習教には祭祀の秘儀も伝わっている。瓊瓊杵尊の後となった木花咲耶姫の物語にも出てくる祈請の如く、「探湯」として伝わっている。神々との対話する審神者の作法である。また、先の「かみながら」は、体の前で合掌するように手を組み、二本の人差指を立てて「印」を結び、邪心なき気持ちでこの真言（真理を表す秘密の言葉）を百唱すれば、初学の徒でも指先に感応を来たす。

令和四年二月七日

大中臣正比呂

記す

